Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

観光地づくりオーラルヒストリー　＜第７回＞

現場での体験を通じてプランナーとしての『座標軸』を求め、持続可能な地域社会形成への貢献を目指した

都市・農村計画　猪爪範子氏

東京生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。同年(社)日本観光協会(現公益社団法人日本観光振興協会)入協。退職した後の 1978(昭和 53)年に由布院温泉観光協会事務局長を務め、次いで地域総合研究所を東京に設立。各地で計画策定や現場に関わりながら、大学での教鞭、原稿執筆、講演などに取り組み、2000(平成 12)年には母校で学術博士を取得。現在は、軸足を国外に移行中。

１.「観光」への接近

【観光との出会いはいつ、どこで・・】

生まれは東京です。私の父は戦前アメリカにいた人で、日本に帰ってから所帯を持ち、私と妹が生まれました。1952(昭和 27)年に、「もく星号」という国内を飛ぶ旅客機が伊豆大島の三原山にぶつかって墜落した事故がありました。その 1 週間前に、家族みんなでその飛行機に乗りました。私は 10 歳くらい、小学生でした。たしか、名古屋空港に降り立ち、志摩観光ホテルまで延々と車に乗って行ったことを覚えています。父は、ホテルが好きでした。戦後、進駐軍に接収されていたホテルが次々に解除になった時代です。学校が休みになると、日光、箱根、中禅寺湖、河口湖、赤倉の赤い尖った屋根のホテルにも連れて行ってもらいました。写真がたくさん残っています。父自身、とても旅行が好きだったと思います。

私が中学生の頃、父は数か月間アメリカ各地を旅しましたが、行く先々からたくさんの絵ハガキを送ってくれました。そのどれもに、皆に見せたい、皆で来ようと書いてあります。筆まめな人でしたね。大きな箱いっぱいに残っているそのハガキは、大事な宝物です。今も、ときどき見ます。

そういう意味では、母もその影響を受けていましたね。通年、和服を着てすごした人でしたが、「死ぬまで年に一度はハワイ」を、実践しました。一番好きなハワイはマウイのハナ。最後のハワイはマウイのカアナパリ。92 歳の時でした。その時、10 年パスポートを取りましたが、旅券発給所のスタッフの方から「100 歳過ぎてもハワイ」と激励していただき喜んでいました。でも、それから 2 年後の一昨年、そのパスポートを持って母は他界しました。私が旅行好きなのは、父母、とりわけ父の影響でしょうね。

私は勉強好きではなかったし、父は「女の子は嫁に行けばいい」という人でした

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

から、もともと大学に進学するつもりはありませんでした。高校１年の時、その父が突然に逝ってしまいました。高校を卒業するとき、母が「大学に行ったら」と言ってくれたものの、どうしてよいかわからず、大いに戸惑いました。

当時習っていたピアノの先生のお父さんが東京農業大学（以下、東京農大）の学長さんだったことや、住んでいたところが代々木八幡だったこともあって、経堂にある東京農大へは小田急線１本で行けるから便利でいいかなという程度が、この大学を選んだ動機といえば動機かもしれません。基本的には、あまり東京が好きじゃなかったこと、父が突然に亡くなって親族間でいろいろあったものですから、家や母から自立しようという思いも強くありましたね。卒業して仕事を持った時に、東京以外のところに住みたいとも思っていました。それには地方に関わりができそうな東京農大がいいのかなと考えた覚えもあります。母は、女子大の英文科とか家政学科などをイメージしていたようで、私の選択にびっくりしていました。でも、反対はしませんでした。それ以降も、少し変わった私の選択に、母はまったく反対しませんでした。「いいも悪いも、戻ってくるのは全部自分に」というのが、彼女の考え方だったようです。「自分が下した決断は、自分にしか責任がとれない」ということですね。

こうして東京農大の農学部に入り、造園学科に進みましたが、この学科を選んだのは消去法です（笑）。大学で学ぼうという動機が薄いものですから。最初は農学科にしようかなと思ったら、誰かが「田んぼに入ったこともないのに、農学科なんてやっていけるの」と。じゃあ林学科にしようかな。でも、運動神経の鈍い私は、木登りができないし…。なら、造園かな。楽そうだからと。でも、これも、思い返せば、父の影響が色濃いような気がします。父のライフワークのひとつは、地方の名園の復興でしたから。その現場にたびたび連れて行かれましたし、幼いころからの家族旅行の先々で、名園を見せられて退屈した覚えもありました。

その時の農大の先生に、江山正美さんという方がおられました。風貌、言動ともに、とてもユニークな方で、東京大学の林学を出られたとか。日本観光協会（以下、日観協（現日本観光振興協会））の仕事もされていたことを、卒業後、知りました。でも、あの時代ですから、平気で「化粧しないのか」、「化粧しろ」とか、おっしゃる訳です。洋服のことも、たくさんコメントされました。レポート出しに行って、何でこんなこと言われなきゃならないかと、当時思っていましたね。

造園学科の同期の女性は９人いました。造園学科に一番女子学生が多くて、他の専攻ではほとんどいませんでしたから、広い学内で女性用トイレは１か所だけ。体育の時の更衣室がなくて、体育教員室の一角をカーテンで仕切って使っていました。大学は面白くありませんでした。大教室での授業は薄かったし、専門的な職業教育のプログラムは皆無だと思いました。だから、結果的に在学中は遊んで暮らしました。社会人になって、いろいろな大学の出身者に出会って、学生時代に仕込んだことの違いに愕然としたものです。余談ですが、「農大は専門学校かい」と聞く人がいて、「なぜ」と聞いたら、「君は教養がないから」。絶句しましたよ。

学校に行かずに何をしていたかというと、小さな土木系事務所で、宅地造成の図

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

面を書いて、土量計算をしていました。手で、ガシャガシャまわす、うるさい計算機で。ボタンタッチの計算機が出る前のことです。そのうち、造成する宅地に埋め込まなくてはならない公園の図面を書かせてもらうようになったので、設計資料集成のページを繰りながら、見積書までつくりました。社長夫妻は広島、一連の作業を手取り足取りで教えてくださった技術屋さんは徳島出身。大学を卒業してからお会いすることはなくなりましたが、50 年以上たっても、忘れがたい方たちです。

もらったお金の使い道ですが、全部、旅行に費やしました。周遊券とユースホステルを使った格安旅行で、在学中に宗谷岬から枕崎、沖縄まで行きました。沖縄に行くために取った、簡単なパスポートが残っています。60 年代の日本には新幹線も高速道路もなかった代わりに、それぞれに固有の景観や文化があって、それは美しく、人びとは寛容で親切でした。簡単に旅券が取れるようになったのは、東京オリンピック直前の大学 3 年のとき。だから、学生時代に国外に出る機会はなかったです。

写真1　猪爪範子氏への取材風景
(2015(平成27)年9月15日、長野県上田市)

【なぜ観光の道を選んだのか】

1965(昭和 40)年に卒業しましたが、前年に国家公務員造園職の試験に合格してい

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ました。でも、女子の雇用についての前例がないという理由で、採用されませんでした。「少し早く生まれすぎたね」なんて言われましたよ。2 次の面接試験で、「結婚したら仕事辞めるだろうね」なんて質問ばっかり。公務員試験が、資格試験で採用試験でないことも知りませんでした。造園職として、建設省(当時)に女性が採用されたのは、それから１０年くらい後だったでしょうか。

卒業を目前にした私に、救いの手を差し伸べてくださったのが、日観協に勤めておられた高橋進さんでした。非常勤で東京農大で教えていらして、学生たちによる観光研究会の指導もされていました。私は大学に寄りついていませんでしたから、参加していませんでしたけど。「国家公務員の試験に受かっているなら、日観協に来たら」と言ってくださいました。オフィスは丸の内でしたから、ヒールのある靴を履いて、通勤電車に乗る OL になったわけです。

造園学科を出た女性の同級生たちは、3 人がすぐに結婚して専業主婦に、就職を希望した人たちは大学の世話にならず全員就職しました。園芸関係の出版社に勤めた人、神奈川県の農業系高校の先生になった人、業界新聞の編集者になった人、岩手県の国体施設建設現場に潜り込んだ人、精神病院で作業療法士になった人、それに私。定年まで一筋に勤めあげた人もいます。

大学は、二言目には「就職先探すより、嫁に行く先を探せ」でしたよ。入学したときには、「これからの女性にとって、可能性に満ちた職域」なんて言っていた同じ先生が。だから、みんなで就職情報を持ち寄り、助け合いました。70 歳を過ぎて会うことは稀になりましたが、卒業後も支え合って生きた、終生のよき友人たちです。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

表１　猪爪範子氏の経歴

年	経歴
1965(昭和 40)年	東京農業大学農学部造園学科卒業
1965(昭和 40)年	社団法人日本観光協会調査部研究員
1978(昭和 53)年	由布院温泉観光協会事務局長
1979(昭和 54)年	大分県中小企業情報センター研究員
1980(昭和 55)年	株式会社シーエスケイ(地域総合研究所)設立
1992(平成 4)年	関東学院大学工学部非常勤講師 (工学部 2 部造園学総論)(建築学科 1 部景観論)
1992(平成 4)年	東京農業大学非常勤講師 (特論、環境計画基礎)
1997(平成 9)年	東京農業大学造園学科非常勤講師 (観光リクレーション計画論)
2002(平成 14)年	広島市役所企画総務局理事
2005(平成 17)年	社団法人ツーリズムおおいた事務局長を経て ツーリズムコーディネーター

表２　学会および社会における活動

年度	内容
1988(昭和 63)年	森林フォーラム実行委員
1992(平成 4)年	神奈川県観光審議会委員
1992(平成 4)年	日本造園学会編集委員
1992(平成 4)年	福井県ふるさと大使
1995(平成 7)年	日本造園学会評議員
1995(平成 7)年	林野庁林政審議会専門調査委員
1995(平成 7)年	財団法人日本農業研修場協力団理事
1995(平成 7)年	日本都市計画学会学術発表会論文審査部会委員
1995(平成 7)年	まちづくり学会評議員
1995(平成 7)年	財団法人地域活性化センター 地域づくりリーダー養成塾専任講師
1998(平成 20)年	東京都観光事業審議会委員
1999(平成 21)年	長崎県政創造会議委員
2004(平成 6)年	独立行政法人国際協力事業団 「インドネシア共和国地域開発政策支援の専門家」
2005(平成 7)年	独立行政法人九州研修所講師
2007(平成 9)年	国土交通省北陸圏広域地方計画懇談会委員

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

表 3　著書

年	タイトル／共著・単著の区別	出版社
1974（昭和 49）年	市のたつまち(共著)	現代旅行研究所
1976（昭和 51）年	民宿 ： 全国特選ガイド 現代旅行研究所編	現代旅行研究所
1978（昭和 53）年	ネパールからアフガン・ソ連 はじめての旅・ひとり旅(単著)	あむかす事務局
1980（昭和 55）年	地域の文化を考える(共著)	日本経済評論社
1980（昭和 55）年	まちづくりと地場産業(共著)	日本経済評論社
1980（昭和 55）年	観光地環境の再点検(共著、これからは知恵くらべの時代！“地域”に根差した観光地づくり新しい時代への準備を始めつつある湯布院町の例(共著)	社団法人日本観光協会
1981（昭和 56）年	ムラおこしにおける理論と実践(共著)	総合研究開発機構 大分県中小企業情報
1981（昭和 56）年	文化行政とまちづくり(共著)	時事通信社
1982（昭和 57）年	中野まちづくり白書(共著)	中野区役所
1985（昭和 60）年	環境を創造する造園学からの提言(共著)	日本放送出版協会
1989（平成元）年	リゾート開開発計画論-地域形成とリゾートコンプレックス(共著)	ソフトサイエンス社
1989（平成元）年	地方創造への挑戦(共著)	ぎょうせい
1989（平成元）年	まちづくり文化産業の時代 地域主導型リゾートをつくる(単著)	ぎょうせい
1989（平成元）年	湖都のおんな華やぐ 松江発女どきのまちづくり 松江市連合婦人会(編著)	ぎょうせい
1990（平成 2）年	プラスチックチルドレン(編著)	世田谷区役所
1991（平成 3）年	自由時間都市まちだをつくる(共著)	町田市役所 地域総合研究所
1996（平成 8）年	地域づくり読本-理論と実践(共著)	ぎょうせい
1997（平成 9）年	まちを設計する－実践と思想－(共著)	九州大学出版会
1998（平成 10）年	女性によるまちづくりハンドブック―女性たちが拓く地域づくりの新しい世界(共著)	地域づくり団体連絡協議会、ハーベスト出版
1998（平成 10）年	ランドスケープの研究第 2 巻(共著)	彰国社

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

表 4　論文、雑誌記事等

年	タイトル	雑誌名	頁
1969(昭和 44)年	リゾートの理想郷を南郷谷の温泉に	日本温泉協会/温泉 37(10)(416)	49-52
1973(昭和 48)年	＜紀行＞ ヒマラヤの温泉“タトパニ滞在記”	日本温泉協会/温泉 41(9)(463)	14-17
1973(昭和 48)年	観光開発とレジャー公害-住民と遊民の間に横たわる悩み-(単著)	綜合マネジメント株式会社,綜合ユニコム株式会社,日本エコノミストセンター/レジャー産業資料 6(3)(62)	56-61
1975(昭和 50)年	櫛と口琴	山村民俗の会 編/あしなか (145)	6-7
1976(昭和 51)年	なんとなくオーストラリアの陸路を 9 千キロ	高速道路と自動車 19(3) 高速道路調査会編	21-22
1977(昭和 52)年	温泉観光と市民のまちづくり	日本観光協会/月刊観光 9 月号	-
1977(昭和 52)年	市民型観光へのまちづくり	日本青年会議所/億 6 月号	-
1977(昭和 52)年	湯布院の産物を湯布院人が消化する法(報告)(地域における生活と文化の再生—湯布院「この町に子どもは残るか」〈シンポジウム〉シンポジウムでの討議—よりあい討論から) 八木昭道、秋山寛	地域開発 148	70-78
1977(昭和 52)年	次代に贈るべき「国の光」—松山シンポジウムに参加して(観光とまちづくり—シンポジウム・松山にとって観光とは何か〈特集〉)	地域開発(150)	40-42
1977(昭和 52)年	観光とまちづくり—地域にとって観光とは何か(観光特集)	高速道路と自動車 20(4) 高速道路調査会編	20-21
1977(昭和 52)年	まちづくりと「観光」●愛媛県松山市＜全国まちづくり集覧＞	有斐閣/ジュリスト増刊総合特集 9、	227-229
1978(昭和 53)年	F 村のこと	高速道路と自動車 21(4) 高速道路調査会編	19-20
1978(昭和 53)年	1200 分之 1 の生活	道路緑化保全協会,「道路と自然」編集委員会 編/道路と自然 6(1)(21)	25-25
1978(昭和 53)年	遍路道の復活と現代的再生	日本ナショナルトラスト/自然と文化春季号	43-46
1978(昭和 53)年	島の観光と自立(「地域にみる生活と文化の再生・島に生きる—隠岐」〈シンポジウム〉分科会からの報告)	地域開発 163	45-51
1978(昭和 53)年	ホームスパンを織る人々	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (207)	30-31
1978(昭和 53)年	生きがい焼が文化を創った	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (208)	30-31
1978(昭和 53)年	よみがえる人形の町・三春	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (209)	30-31
1978(昭和 53)年	町をあげて味噌づくり	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (210)	30-31
1978(昭和 53)年	産業化の中で自家生産を守る	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (212)	30-31
1978(昭和 53)年	芽生える町、根付く村—酪農と地域産物の流	日本レクリエーション協会/ レクリ	30-31

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

	通	エーション (213)	
1978(昭和 53)年	世界の農業を学ぶ	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (216)	30-31
1978(昭和 53)年	芽生える町、根付く村—地域運動が潮となるために	日本レクリエーション協会/ レクリエーション (218)	30-31
1978(昭和 53)年	特集 青年と地域社会 (3)まちづくりの新しい動き	日本離島センター,全国離島振興協議会,日本離島センター広報課編/しま 24(1)(94)	32-38
1979(昭和 54)年	地域自立への道(第二回) 由布院のまちづくり運動	日本離島センター,全国離島振興協議会,日本離島センター広報課編/しま 25(2)(99)	72-77
1979(昭和 54)年	伝統工芸の振興(沖縄シマおこし研究交流会議—第 1 回地場産業の振興〈特集〉自由討議の発言から)	地域開発 174	100-103
1979(昭和 54)年	まちづくりと観光	観光文化 3(5)(17) (財)日本交通公社	10-15
1979(昭和 54)年	〔座談会〕--国立公園に期待するもの / 杉尾伸太郎 ; 原重一 ; 猪爪範子 ; 下均 ; 水野隆夫	日立財団,日立環境財団,環境調査センター/環境研 (25)	75-89
1980(昭和 55)年	総括コメント・調査委員会から(地場産業と地域社会〈特集〉人形のまち岩槻—地場産業と地域社会〈シンポジウム〉)猪爪範子、森戸哲,清成忠男	地域開発 184	41-42
1980(昭和 55)年	地域と観光	日本観光協会/月刊観光 1 月号 No.160	17
1980(昭和 55)年	地域の自立的振興をめざす新潮流	ダイヤモンド社/週刊ダイヤモンド別冊	138-139
1981(昭和 56)年	座談会 高齢化社会への地域の対応 / 地域総合研究所研究員 猪爪範子 ; 日大理工学部教授 木下茂徳 ; 横浜市技監 田村明 ; 清水建設・元総合研究開発機構研究員 長谷川文雄	全国建設研修センター,『国づくりと研修』編集小委員会 編 全国建設研修センター/国づくりと研修 (16)	11-27
1981(昭和 56)年	地域文化産業としての地場産業——岩手のホームスパン	簡保資金振興センター,簡保資金研究会,郵政省簡易保険局,簡保資金振興センター 編/かんぽ資金 8 月 (39)	26-27
1981(昭和 56)年	越前陶芸村ー(福井県宮崎村)	簡保資金振興センター,簡保資金研究会,郵政省簡易保険局,簡保資金振興センター 編/かんぽ資金 11 月(42)	44-45
1982(昭和 57)年	新しい地場産業をつくる—(岩手県大野村)	簡保資金振興センター,簡保資金研究会,郵政省簡易保険局,簡保資金振興センター 編/かんぽ資金 5 月 (48)	44-45
1982(昭和 57)年	工芸ゆいまーる—(沖縄)	簡保資金振興センター,簡保資金研究会,郵政省簡易保険局,簡保資金	30-31

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

		振興センター 編/かんぽ資金 6 月(49)	
1982(昭和 57)年	まちづくり型観光地の台頭	ダイヤモンド社/週刊ダイヤモンド別冊	134-136
1982(昭和 57)年	文化行政の取組み(8)由布院・住民と行政による協働のプロセス	日本ナショナルトラスト報(163) [7]	6-7
1982(昭和 57)年	快適環境北から南から	ぎょうせい、日本環境協会/かんきょう 7(5)(37)	76-77
1983(昭和 58)年	快適環境北から南から	ぎょうせい、日本環境協会/かんきょう 8(2)(40)	93-95
1983(昭和 58)年	問題提起 四国浮上のため戦略(四国振興の道を求めて—「四国市長勉強会」総括シンポジウムから〈特集〉全体討論 四国振興の道を求めて)	地域開発 223	25-26
1984(昭和 59)年	自主的社会参加活動と地域の活性化	国土地理協会編、全国余暇行政研究協議会/Schole 10(1)	17-22
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 1 回)いま、「観光行政」は	ぎょうせい編/晨 4(5)(30) [87]	128-131
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 2 回)小衆時代の観光	ぎょうせい編/晨 4(6)(31)	118-121
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 3 回)まちづくり型観光地	ぎょうせい編/晨 4(7)(32)	116-119
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 4 回) 非日常性のパワー	ぎょうせい編/晨 4(8)(33)	128-131
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 5 回)地域セールス	ぎょうせい 編/晨 4(9)(34)	138-141
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 6 回)ストリート観光	ぎょうせい 編/晨 4(10)(35)	114-117
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(第 7 回)ニュー・セクター	ぎょうせい 編/晨 4(11)(36)	112-115
1985(昭和 60)年	ポスト大衆社会の観光行政(最終回)観光計画のつくり方	ぎょうせい 編/晨 4(12)(37)	114-117
1985(昭和 60)年	「地方の時代」の農業青年に何を期待するか—本音を出し合い 連帯して地域づくりを(組合員後継者と農業・農協〈特集〉)	全国農業協同組合中央会編/ 農業協同組合 31(1)	14-29
1985(昭和 60)年	提言—「行政の文化化」と自治体行政 / 中川剛 ; 岡崎昌之 ; 五十嵐敬喜 ; 猪爪範子 ; 三好康夫 ; 米山市郎 ; 田村和寿 ; 尾崎憲治 ; 鳴海正泰 ; 西尾孝司 ; 安藤八重子 ; 久住剛	公務職員研修協会,公職研 編/地方自治職員研修 臨時増刊 18(19)(229)	78-113
1987(昭和 62)年	小喝一声・ひとこと言わせてくれ このまま黙っていたら田舎の沽券にかかわる	富民協会/農業富民 59(3)	35-35
1987(昭和 62)年	特産時評 ムラおこしがあぶない	日本特用林産振興会,日本特用林産振興会編集委員会 編 農村文化社/特産情報きのこ etc. 9(3)(99)	17

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

1987(昭和 62)年	東京ウォッチングが始まった	ぎょうせい 編/晨 6(12)(62)	52-53
1988(昭和 63)年	女どきのまちづくり	ぎょうせい 編/晨 7(5)(67)	24-27
1988(平成元)年	地域づくりはパートナーシップで	財団法人自治総合センター/自治だより No.127	
1992(平成 4)年	湯布院町における観光地形成の過程と展望(日本造園学会研究発表論文集－10－)	造園雑誌 55(5)	367-372
1993(平成 5)年	農村社会における地域景観認識の変遷に関する研究(1993 年度〔日本都市計画学会〕学術研究論文集)	日本都市計画学会編/都市計画論文集(通号 28)	667-672
1993(平成 5)年	町田市における自由時間都市の形成(余暇時代の都市づくりを考える〈特集〉)	日本都市計画学会編/都市計画(183)	46-49
1993(平成 5)年	「九州の風土とランドスケープ」特集にあたって(〈特集〉九州の風土とランドスケープ)	造園雑誌 57(4)	327
1993(平成 5)年	どうしたら公園は都市の個性づくりに貢献できるか	日本公園緑地協会/公園緑地 54(3)	25-28
1993(平成 5)年	景観からの地域づくり——島根町のケースから	地域政策研究会 編 第一法規出版/地域政策 3(2)(10)	25-29
1993(平成 5)年	地域づくり・まちづくり	経済産業調査会/いっとじゅっけん 38(8)	11-13
1994(平成 6)年	湯布院町の地域形成における住民意識の変化(〈特集〉九州の風土とランドスケープ)	造園雑誌 57(4)	364-369
1994(平成 6)年	湯布院町における農村景観をめぐる争点の歴史的変遷に関する研究(日本造園学会研究発表論文集－12－)	造園雑誌 57(5)	97-102
1994(平成 6)年	特集 地域活力と島づくり 讃岐広島シマおこしのシナリオ-新段階を迎える島嶼活性化課題	日本離島センター,全国離島振興協議会,日本離島センター広報課編/しま 39(1)(154)	29-45
1996(平成 8)年	訪れてよく、住んでよいまちを目指して	庭 108 号	122-126
1997(平成 9)年	地域づくりとリゾート整備—農山漁村における内発的観光開発の成果と課題(特集 地域資源活用型リゾートへの提案)	レジャー産業資料 30(3)	64-70
1997(平成 9)年	造園専攻女史学生の道路とキャリア形成」特集にあたって	ランドスケープ研究 日本造園学会誌 61(1)	5-7
1997(平成 9)年	造園専攻女子学生の進路に関するアンケート調査(特集 造園専攻女子学生の進路とキャリア形成)(共著:麻生恵、荒井歩)	ランドスケープ研究 日本造園学会誌 61(1)	8-15
1998(平成 10)年	学会における女性の現状(単著)	都市計画 47(3)	43
1999(平成 11)年	農村の観光地化の過程に関する研究：大分県湯布院町の観光地形成の過程分析	東京農業大学	
2000(平成 12)年	平成 11 年度都市計画学会 論文奨励賞を受賞して 農村の観光地化の過程に関する研究—大分県湯布院町の観光地形成の過程分析—	都市計画 49(3)	104

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

2003(平成 15)年	農山漁村地域の振興と人材育成(特集　都市と農山漁村の共生と対流―スローライフをめざして)	地方議会人未来へはばたく地方議会/全国市議会議長会編 34(5)	13-16
2006(平成 18)年	一村一品運動と開発途上国　日本の地域振興はどう伝えられたのか　松井和久・山神進編 「第 3 章　農産物直売所からみた農村起業のあり方」	アジア経済研究所	65-89
2007(平成 19)年	農産物直売所が農村を活性化する―大分県の村おこし事例から	日本貿易振興機構アジア経済研究所研究支援部編/アジ研ワールド・トレンド 13(2)(通号 137)	8-11
2008(平成 20)年	愛すべき現場をもて―由布院の思いを一つに(共著:大橋幸子、中谷健太郎)	土木学会誌 93(1)	52-53

表 5　受賞

年	受賞内容	授与者
1980(昭和 55)年	第 6 回　造園大賞	東京農業大学
1982(昭和 57)年	自治体学会公募研究論文一席	自治体学会
2000(平成 14)年	論文奨励賞	日本都市計画学会

図 1　『まちづくりと文化産業の時代』ぎょうせい、1989

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

２.「観光」における取り組み

【観光分野で何をやってきたのか】

〈日本観光協会（調査部）への入協と業務〉

1965（昭和 40）年に、日観協の調査部に入れていただきました。私が入ったときは小谷達男さんという、後で立教大学社会学部観光学科教授になられた方が協会誌の編集などをされていました。私の就職のお世話をしてくださった高橋進さんは、当時調査部長をなさっておられました。私の後に、北海道庁から奈良繁雄さんが来られて、高橋さんの補佐をされました。

調査部の仕事は国土・地域開発の調査や計画策定で、自主事業もあれば国や県、基礎自治体から受託した仕事もたくさんありました。協会誌の編集作業も、ここで担当していました。

男女共同参画も何もない頃でしたから、私の仕事は雑用が多くて、通帳を持たされて銀行へのお使い、お茶くみ、掃除などなども。「お客さんだよ。お茶出して」なんて言われると、「私はお茶汲みではありません！」と口答えして、嫌われていました。もう一人、同い年の女性のスタッフがいました。小島さんという下町のお蕎麦屋さんの娘さんで、彼女はタイピストでした。とても素直な気持ちのよい人で、ぶつくさ言う私をかばってくれました。あの頃は、宴会というか会食の機会も多かったので、駆り出されてお酒のお酌をやらされることもたびたび。お酌なんて家でさえやったこともないのに。「私はそういうことをやるために給料もらってません」など、いちいち抵抗しました。だから、いつも、ひりひり、チクチクとしていましたね。外に対しても、自分の中ででも。

時代は高度経済成長の上り坂、日本各地から観光診断の依頼がどんどん入って来ていました。担当分だけでも、年間、30 件を超えていたような記憶があります。外の研究者に委託をして、その前後の事務処理、レポートの編集や印刷などの仕事をしました。でも、先生たちのレポートは、既存資料をもとにした現状分析が長くて、後ろのプランの部分がほとんどなく、私は批判を募らせました。このレポートを受け取った側は、何を、どう始めたらよいかわからないと、心配だったのです。一度、従来型の構成をひっくり返して、後ろの提案を前に出したら、某先生からものすごく怒られました。（笑）

国や県から受託した仕事を日観協が大学の研究室に再委託した場合でも、協働で作業するチャンスは、少しありました。私は鈴木忠義さんのプロジェクトに、そうした形で関わらせていただきました。当時、日観協が自主事業でブロック別の観光開発構想の策定をしていて、東大都市工から東京工業大学に移られた先生のティームが担当された九州と東北ブロックの作業に加えてもらえました。とても、嬉しかったです。日観協に就職してから初めて、楽しいと思いました。

5 時まではオフィスにいて通常の雑用やら何やらを消化して、その後は大学の研

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

究室に移り、計画策定の作業です。プロジェクトのメンバーは、多くが院生でしたから、皆、夜になると元気になるようで、連日、深夜まで研究室にいました。強いられてではなく、面白かったからできました。当時の時代の気分は、戦後復興を見事に遂げて、さらなる発展を予期させる明るさに満ちていましたしね。電車がなくなると、鈴木先生が家まで車で送ってくださいましたが、母は「こんな時間まで何してたの」と怒っていました。三田育雄さんもそのメンバーの一人でいらしたでしょうか。私が、夜な夜な鈴木研究室に通っていた時期は、三田さんが、ラック計画研究所を作られる少し前のことだったと思います。

日観協は丸 5 年勤めて辞めました。理由は、給料が私の 1 年後に入ってきた人と同じだったから。ふとしたことで気付いて、「どうしてですか」と聞いたら、「ごめん、間違えた」と言われて。頭に来て辞めました(笑)。もともと男女で給与ベースが違っていたこともあったと思います。でも、言い方の惨さに、今でいう、切れたのです。ご恩のある高橋さん、奈良さんにも相談しないで、退職しました。

日観協では、「自意識過剰」なんてニックネームが密かについていたようです。それも、これも、女性ゆえの差別と怒っていましたが、年を経て、冷静に考えられるようになったいま、はらはらしながら、皆さん、暖かい助けの手を出してくださっていたと受け止めるべきだったと。そう思えるようになるまでには、結構、時間がかかりましたけどね。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

委員会と組織
Committee and organization

組織図

日本観光協会 ― 東北地域観光総合調査委員会
- 東北6県 ― 調査協力
- 鈴木研究室 ― 調査・研究 取りまとめ
- 日本観光協会事務局 ― 調査・研究・連絡

東北地域観光総合調査委員会

委員長	加藤誠平	東京大学名誉教授
委員	出口一重	日本観光協会専門委員
〃	林幸二郎	運輸省観光局整備課長
〃	今井勇	建設省計画局地域計画課長
〃	今野源八郎	東京大学名誉教授
〃	名波克郎	国鉄旅客営業局営業課長
〃	西阪文雄	日本観光協会専務理事
〃	大井道夫	厚生省国立公園局計画課長
〃	大矢寿	林野庁指導部計画課長
〃	坂元正典	文化財保護委員会事務局管理課長
〃	鈴木忠義	東京工業大学助教授
〃	八十島義之助	東京大学教授
〃	吉井健次	東北経済開発センター事務局長
〃	井下明	国鉄東北支社営業調査役
〃	坪松定長	日本交通公社東北支社長
〃	竹内和夫	青森県水産局商工部長
〃	河野文雄	岩手県経済部長
〃	羽田光雄	宮城県商工労働部長
〃	笹山秀武	秋田県産業労働部長
〃	藤井敏雄	山形県商工労働部長
〃	立沢甫昭	福島県企画開発部長

調査研究・取りまとめ・連絡

東京工業大学グループ（工学部土木工学科）
鈴木忠義　森地茂　中沢和則　大橋清治
毛塚宏

東京大学グループ（工学部土木工学科・都市工学科）
花岡利幸　原昭夫　畑口忠彦
村田隆雄　中村良夫　渡辺貴介

日本観光協会事務局
高橋進　密本定一　奈良繁雄　緒爪龍子

図 2,3　東北地域観光開発の構想計画と開発の指針 1968
（左）表紙　（右）社団法人日本観光協会

日観協ではいろいろな分野の先生方と出会いました。今でも年賀状をくださる先生がいらっしゃいます。その方は、レポートの構成の順序を、相談しないで勝手に

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

組み替えたことで怒った先生です。当時は、スペースコンサルタントの前野淳一郎さんや、日本自然保護協会の理事長をされていた田畑貞寿さん。東京大学建築学科ご出身で東京電機大学の先生となり、長崎の軍艦島を最初に調査して世にその価値を問うた阿久井喜孝さんなどもこの頃のお知り合いです。日観協で働いたことで、仕事の守備範囲や人的ネットワークが広がり、その後の人生の「基礎体力」を養うことができたと思います。

〈退職後に 2 度の長期バックパッカー旅行〉

日観協を辞めた時にもらった退職金で、長期のバックパッカーの旅に出ました。目指したのは友達のお姉さんがいるネパールのカトマンズです。東京のネパール大使館でビザをとった時に「何しに行くの？」と聞かれて、友達に会いにいくと言ったら、8 ヶ月のロングビザを出してくれました。香港からバンコク、チェンマイからバンコクに戻って、カトマンズに渡り、そのビザで滞在できる 8 ヶ月間、目一杯ネパール国内のあちこちを動きました。

エベレストベースキャンプやアンナプルナ、ドーラギリなどが見えるジョムソン街道、ブッダゆかりのブッダガヤなどを、時に一人で、時に道案内と荷物持ちにシェルパの少年を 1 人雇って、歩いて旅しました。ネパールの後は、インドに出て、デリーから飛行機でカブールに飛び、まだ、ソ連が入ってくる前のアフガニスタンに 1 か月滞在。今はタリバンの根拠地になったマザルシャリフや、爆破されてしまった磨崖仏のあるバーミアンにも行きました。もちろん、一人で。手持ちのお金が乏しくなって、アフガニスタンのカブールでソ連旅行の手配をしてもらい、中央アジアを経てシベリア鉄道に乗り、ナホトカから船で横浜の港に降り立ったときには、出国からほぼ 1 年を過ぎていました。

途中でたくさんの国々を通過し、いろいろな人たちの親切を数限りなく受けました。ここで、私は骨太のオプティミストに変わったような気がします。一人旅に対しては、特に不安もありませんでした。

日本に帰って、たまたま丸善に行った時に鈴木先生とばったり。「何してるんだい」と聞かれて、「何もしてません」と言ったら、前の仕事に引き戻してくださった。前野さんもご自身のスペースコンサルタント、通称スペコンで。田畑さんの飯田市の作業にも参加させていただきました。

ここでまた、ちょっとお金ができたので、2 回目の旅に出ました。今度は広島の常石造船という会社の、パプアニューギニアに行く貨客船に乗りました。片道の船代は 4 万円くらいでしたかしらね。ウナギの稚魚を運ぶ船でしたが、その会社は戦没者の遺骨収拾も積極的にやっていたため、パプアニューギニアに数人の日本人スタッフが常駐していて、事務所もありました。ちょうど、食事を作るおばさんが辞めたとかいうことで、しばしの間潜り込んでご飯を作りました。市場には、南方のどでかい魚を売っていました。どうやって調理したものか、今は覚えていません。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

パプアニューギニアを目的地にしたのは、船に乗って南太平洋に行きたかったから。それで、ポートモレスビーからケアンズに出て、オーストラリアの東側を南下しました。前の旅で知り合ったイギリス人があちこちにいたので、その人達のいるところを転々としてタスマニアまで行き、その途中で南太平洋に出るために、日本の遠洋漁業船のヒッチハイクにトライしましたが、「女は船に乗せない」と軒並み断られました。

仕方ないので、タスマニアを一周した後にメルボルンからオーストラリアの中央部を北上して、エアーズロックを通ってダーウィンからジリ。インドネシアの島々を船と陸路で移動し、シンガポールから日本に帰って来ました。この時も全部で 7～8 ヶ月かかっていましたね。

この旅の経路をよくよく見たら、結果として大東亜共栄圏の南の最前線を旅してきたんだなーと。こんなところで、「えー」と思うようなところで、日本の歌を聞きました。「こんにちは」、「おはよう」なんて声をかけてくる人たちも、たくさん。旅する前は大東亜共栄圏を辿るなんて想像もしていませでしたが、どこに行っても「日本」の痕跡がありました。ラバウルでは埠頭につけた船に乗る台が、沈没した日本の潜水艦のハッチの上の部分でした。水を運ぶために古い潜水艦を使うのは当たり前。ラバウルの大本営本部だった地下壕にも入りましたが、迷路のようになっていて、大きいことにびっくり。

2 回とも安あがりのバックパッカー旅行でした。予算は移動も宿泊も含めて 1 日 5 ドル。ルームシェアのドミトリーで一泊 2～3 ドルくらいで泊まれました。『地球を歩く』はまだなく、当時は『５ dollar a day in ○○』と、出会う先々での旅行者からの口コミ。日本人の旅行者には全く会いませんでしたけど、欧米の若者たちはたくさんいました。いわゆる、ヒッピーの全盛期でしたね。

オーストラリアではサルベーションアーミー(救世軍)はじめ、教会のゲストハウスを泊まり歩いたけれど、どこでもとてもよくしてもらいました。ポートモレスビーでは、ポートモレスビー大学の寮に潜り込みました。あの大学には南大平洋の国々から若い人がたくさん学びに来ていて、この大学を卒業したら 30 代で大臣だそうです。出会った学生は、男女ともに、とてもスマートでした。特に女性たちが。この旅から 5 年くらいして、「大臣になった」と手紙もらったりして。そういう形のネットワークが、さらにつながり、いろんな果実をもたらしてくれます。旅こそ、私の活力源といえますかね。

でも、こんな旅を 2 回やってみて、3 回目をやる気にはなれませんでした。感動するし、びっくりすることも多いけれど、そこで、自分の知的レベルの限界のようなものを感じてしまうようになりました。もっと、言葉ができなきゃつまらないし、その土地のことを深く知っていれば、風景や人びとから読み取るものが違ってきますから。そういうわけで、この時代の旅は終わりにしました。

この時期を総括すると、他人と同じでなくても、一向に構わないと感じられるようになったことでしょうか。ネパールの奥地で、何度も民家に泊めてもらいました。その家では、１０歳くらいの女の子が、自分の体の半分くらいにもなる大きな金属

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

性の瓶を抱えて、毎日、深い渓谷の下まで水を汲みに行きます。それだけで一日の大半が終わってしまいます。もちろん、電気はありません。病気になれば人の背に背負われて、峠を越えてまちの病院に行かなければならない。でも、だれもが明るい顔をしていました。屈託なく、楽しげでもありました。その人々に、「人間の幸せ」は一様ではないと教えられたような気がしました。だから、他人と違うことを恐れる必要はないと、これが実感できたのです。それからはあせらなくなった反面、真面目に一途に生きる人たち、例えば、教員になって定年まで勤め、2 人の娘を医者にした私の妹が典型例ですが、そいう人たちから、ちゃらんぽらんと謗られるようにもなりました(笑)。

〈地域社会研究会に参加～由布院観光協会事務局長に〉

2 回目の旅から帰った後、「地域社会研究会」という職際、学際の研究集団に出会いました。この会は、町田の市政を市民レベルで支える知的集団で、総合研究開発機構(NIRA)の理事長だった向坂正男さんを中心にいろんな方々が結集していました。あの頃の町田市は先鋭的革新市政で、「車イスで歩くまちづくり」をスローガンに、ユニークな行政施策を展開していました。行政が「まちづくり」という言葉を使ったのは、この時代の町田市であったことが確認できます。

メンバーには、東大の行政学者大森弥さん、立教大学の社会学者奥田道大さん、法政大学の経済学者清成忠男さん、東大の文化人類学者樺山紘一さんなどの研究者の方々、行政職員やコンサルのスタッフなど、メンバーは多彩でした。「日本の地域開発の地平は地方にある」と、地方の先駆的事例地域に行き、地元の方々をまじえて現場でディスカッションをしていました。

私は雑用係でしたが、この会に参加したことで、自治体がワイン醸造事業を興した北海道池田町や特定分収林(地域外に住む人に出資を求め、地域と出資者との分収制により保護管理や育成を図る森林)を事業化した島根県隠岐島の布施村など、まだ芽を出したばかりの市民型地域づくりの先進事例をいろいろ目にすることができました。報告書を提出すれば完了という、レポート製造業のようなコンサル業務の限界をどう超えるか、考えるきっかけにもなったと思います。

こうした地域の一つに、観光を基軸に農業と連携した新しい観光のあり方を追求していた大分県の由布院温泉がありました。まだ、シンポジウムという言葉が知られていない時代でしたが、地域の人と外部の人が参加して議論するシンポジウムを湯布院町で開こうとなりました。外部から人が入る前段に、地元の旅館亀の井別荘の中谷健太郎さんを中心に、地域の人びとが集まって毎夜、自分たちの町の課題や将来像などを話し合い、分科会のテーマを決めました。私は、その段階から参加しました。これが私と湯布院町との出合いです。由布院温泉との出会いを正確に言えば、日観協に入った直後の 1965(昭和 40)年５月に、東大都市工の鈴木先生たちが担当された、日本初の観光道路「やまなみハイウェー」の、車窓からの景観調査でここを通過した時でした。調査活動の拠点は飯田高原でしたので、予備知識もなく、

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ただ通り過ぎただけでしたが、豊かに広がる田園、水の流れ、ひなびた草屋根の建物などの印象が強く残りました。

シンポジウムは1976(昭和51)年6月に、「この町に子供は残るか」というタイトルで開催されました。横断幕の「シ」が「ツ」みたいに書かれていて、「ツンポジウム」に見えたのを覚えています(笑)。地元紙が、住民不在のツンポジウムというものを開いたと、意地悪な記事を書いていましたね。湯布院町役場(当時)は、中谷さんたちの取り組みとは、元々かなり距離がありました。このシンポジウムで、その点がよりはっきりしました。地域は、問題を顕在化させずに、なあなあで糊塗するのが普通です。あまりに問題が明快に示され、解題されていくことによって、限られた地域社会での人間関係が窮屈になったという印象です。外部から人材を求めたのは、こうした理由があったからと理解しました。「調整役として誰か外部から来てくれないか」と、地域社会研究会に話があり、私でもいいかしらと手を挙げました。

図4　湯布院シンポジウム「この町に子どもは残るか」の特集表紙
出典：日本地域開発センター『地域開発148号』1977年1月

ずーっと、「女は一文安」の扱いでしたから、最初は、由布院温泉側の志手康治さんに相談して、彼を通じて中谷さんに持ち掛けてもらいました。推薦状を、当時の日観協会長の平山孝さん、地域社会研究会の高山英華さんが書いてくださいました。由布院温泉に行こうと考えたのは、中谷さんたちの活動があったからです。地域外からは高い評価を受け、称賛されていましたが、地域の中では少数派で、辛い立場にあったと思います。それは、事前の準備会から裏方として参加したので、よくわかっていました。

口の悪い地域社会研究会の先生が、「大分県大分郡湯布院町大字東京だぜ」と。本当にそうでした。中谷さんと志手さん、それに玉の湯の溝口薫平さん。見えてい

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

たのはそこだけであったことを、住んでみて実感しました。

当時の清水町長さんは、とても人柄のいい方でしたから、中谷さんたちを排除はしなかったものの、だからと言って積極的に中谷さんたちの路線を汲むこともありませんでした。どう動いても、既存の地域のありように、「住んでよく、訪ねてよい」というストーリーは受け入れられない。だから、スローガンや運動は地域のなかで実態化できない。「それはいいですね。でも、現実がありますからね」。総論賛成、各論沈黙ということになるわけです。

私でよければと手をあげ、ＯＫの返事をもらったものの、当時、観光協会には決まった事務所スペースがなかったので、どこにいたいかと聞かれました。選べるなら「役場」と、答えました。こうして、1978(昭和 53)年に東京から由布院に移り住み、町役場の総務課に机をもらって、由布院温泉観光協会の事務局長の職につきました。

でも、私は最初から由布院での生活と事務局長の仕事を、1 年間限定と決めていました。私に期待されているのはよそ者ゆえの身軽なフットワーク。だから、短期決戦であり、旅人スタイルを崩して土着化してはいけないと考えたからです。

由布院はとても快適で外に対してオープンな地域ですが、やはり地域社会のヒエラルキーは強く、住民サイドの新しい温泉づくりに向けた挑戦は、行政や在来コミュニティとの軋轢で、難渋していました。長く住もうとすれば、どうしても波風を立てないように配慮しなければならず、地元の人と同じような立場になったら私が招かれた意味が薄れてしまいます。

役場の人達は最初、私みたいな異分子が入ってくることに神経をとがらせていました。特に、組合が。でも、慣れると、地域には熱い情のようなものが健在ですから、もっといたらと引き止めてくださいました。次の年の役所の予算に人件費が計上してあったり、役場にいるのが嫌ならペンションを任せるからやってみたらとか。でも、最初に決めた通り、観光協会の事務局長職は 1 年で終えました。

写真 2　由布院温泉観光協会事務局長時代の光景
出典：「愛すべき現場をもて ： -由布院の思いを一つに-猪爪範子氏」
土木学会誌 93(1)、2008-01-15、p.52

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

まちづくりと観光

由布院温泉の場合に……

猪瓜範子

なぜ「まちづくり」か

10

図５　「まちづくりと観光　由布院温泉の場合に」
出典：『観光文化』（財）日本交通公社、1979

〈「ムラおこし」研究で２つの助成金を獲得〉

観光協会の事務局長を退任した後は、自力で由布院との関わり継続に頑張ろうと、総合研究開発機構（NIRA）とトヨタ財団に研究助成金の申請をしました。両方とも獲得できました。地域社会研究会の一連のシンポジウムの時に知り合った NIRA で働く方に、アプリケーションをチェックいただきましたし、研究責任者は大学の先生がいいということで、清成さんにお願いしたり、シンポジウムで構築できた人的ネットワークに助けられました。

NIRA の助成は地方シンクタンク向けだったので、県の中小企業情報センターに受け皿となってもらい、私は情報センター研究員のスタッフという形で、助成金から活動資金の提供を受けました。研究内容は、由布院で展開していた住民主導の「内発的な地域振興」を、過疎地振興のモデルにするというものでした。由布院をはじめ、大分県内の各地で地域振興に取り組む人たちを訪ね歩き、どういう課題があるのか、何が問題かを調べました。取り上げた地域は「梅栗植えてハワイに行こう」というキャッチフレーズで有名になった大分県大山町などです。県下を網羅して調べる体制ができていなかったので、朝日新聞大分支局の宮崎さんが協力してくださいました。県庁は、知事の平松守彦さんが好意的に受け止めてくださいましたが、県庁組織は怪訝な顔で、「頑張っている」という言葉は行政用語にないなどの理由

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

をあげて、終始、冷ややかでした。

内発的な地域振興というのは、社会学者の鶴見和子さんたちがおっしゃっていた「地域の内発的発展」のいわば実務版。人目を惹く、豪華な観光資源がなくても、住む目線で気持ちのよい地域を作れば人が来るという由布院のケースを研究したことによって、地域づくりの新地平が拓いたと、私は自負しています。ここから、「住んでよく、訪ねてよいまちをつくる」というコンセプトを導き出しました。

NIRA に助成を申請した研究のタイトルは「ムラおこしにおける実践と理論」。研究課題のコンセプトを言い表す言葉として「ムラおこし」という言葉をつくり出しました。これより以前に「シマおこし」という言葉を造語したのが、やはり地域社会研究会の活動を通じて知り合った、森戸哲さんです。

「シマおこし」とは、本土復帰した沖縄の先島ではじまっていた、本土の企業進出による植民地的発展ではなく、地域資源や人材を基本とする草の根の集落振興運動を表現したもので、私は「シマ」を「ムラ」に変えて、タイトルに使いました。この「〇〇おこし」という言葉は、いち早く中央官庁が使うようになって瞬く間に普及しました。今では日本語として定着していることに、感慨深いものがあります。

NIRA OUTPUT

NRS－79－4
総合研究開発機構
助成研究

ムラおこし(内発的地域振興)
の実践と理論

昭和55年2月　大分県中小企業情報センター

図 6　『ムラ起こし(内発的地域振興)の実践と理論』
大分県中小企業情報センター

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

〈地域総合研究所を設立〉

2 つの助成金による仕事を抱えて東京に戻り、地域振興を支える東京の拠点を作ろうということで、1980(昭和 55)年に株式会社シーエスケイ(地域総合研究所)を設立しました。最初の数年は地域総合計画研究所でしたが、長いので、途中で地域総合研究所に短縮しました。集まったのはそれぞれ専門分野が異なる 4 人で、私と森戸さん、清成さん、斎藤さんの４人。そこに、いろいろな方たちが出資してくださいました。湯布院の清水喜徳郎町長、中谷健太郎さん、隠岐の布施村の村長さんも。

森戸さんは、とても視野が広く、頭のよい人だと思います。地域の問題はひとつの専門分野だけでは解決できない、幅広い知見からのアプローチが欠かせません。彼の役割というかポジションは、複雑にからんだ問題の端緒を見つけてそこに穴をあけてダイナマイトを仕掛け、爆破したことでバラバラに細かくなった問題のピースを、いろいろな分野の専門家たちが拾って自身のカテゴリーのなかで分析し理論を組み立てる。それらを地域にとって有用なものにするには、専門ごとに分断された研究成果をもう一度組み立て直さなくては生かせません。それができる人は、そう多くはいないと思います。一つのカテゴリーにはまらず、複合的にものを見、再構築できる能力者がいなければ、外部の知見は内部化しないのです。

地域総合研究所のメンバーは、大学で教えるなど、他に仕事を持っていました。それもあって、専従で給料をもらうという関係ではなく、自分の給料は自分で稼ぐ。事務所には本を置いたり、電話番をしてもらうためというつもりでした。フリーランスの集合体みたいな感じでね。

でも世の中って面白い。旗を挙げるとその旗が一人歩きするんですよ。地域総合研究所では、地域におけるさまざまな課題を市民の目線で解題するという場面をたくさん与えられ、だんだんと、コンサル事務所のような形に推移してゆきました。

表 6　地域総合研究所の「研究所が目指すもの」

「私たちはそれぞれ長期にわたって、地域の調査研究、計画づくり、さらには実践活動に従事してきましたが、全国の傑出したまちづくりの担い手の方々の強い勧めによって、その出資と援助を受けて、研究所という組織を結成しました。各地の地域づくりのリーダーや意欲的な行政担当者と深く結び付いた形で出発した当研究所としては、設立時の初心を貫き、地域振興の新しい領域を切り開くという魅力的な活動に向けて、微力を尽くしてゆきたいと思っております。」

出典：猪爪氏提供資料より

〈愛媛県内子町とのつきあい〉

内子とは長い付き合いをしました。長期に町長職にあった河内さんが東京農大の１年先輩でしたし、隣接する五十崎町には酒造会社を営む亀岡徹さんがいました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

学生の頃には知りませんでしたが、内子の計画に関わるうちに農業後継者と名乗っていた河内さんが町長になり、亀岡さんが商工会会長になりました。学生時代からお二人は親友で、同じ東京農大に学び、絵画や登山などのクラブ活動も一緒だったとか。

最初の糸口は、愛媛県松山市の観光計画を、日観協から受けたことにあります。当時の道後温泉には、ヤクザの抗争騒ぎが多発し、客足が大きく落ち込んでいました。かつては、伊予鉄の株を買い、株主優待パスを持って電車に乗り、道後温泉の朝湯に行く。これが松山市民のステータスと言われていました。大型旅館が林立し、集客は専門の旅行業者が担い、風俗営業がたくさん立地するようになって、かつての市民目線はなくなってしまった。それを回復しよう。住む人の目線でもう一度見直そうということで、この時に、初めて「住んでよく、訪ねてよい」というフレーズを、計画書のなかで使ったような気がします。(『市民がつくる観光文化都市－松山市観光診断調査－』松山市、昭和 51 年度)。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

229　まちづくりと「観光」　ジュリスト

こうして昭和五二年の一月に、松山市主催のシンポジウム『観光とまちづくり――松山にとって観光とは何か――』が開催された（資料四四）。錚々たる人びとの発言があり、地元から市の理事者や組合理事をはじめ企画・文化・商工などの職員、管内宿泊、極氏、全逓、県庁などの各界から、また主催産物や福祉・文化活動などに携わる市民、地域の伝統的な生産技術を持つ人々など、市外からは県及び周辺市町村の担当者、そして都市計画・観光・経済・自然保護などの分野で活躍する専門家が加わった。

詳細はすでに別資料にまとめてあるので（資料四）、ここでは当日の話題を少し紹介してみる。

観光文化都市を標榜する松山市であるが、この規模の都市を支える都市機能の脆弱さからすれば、産業的な意味合いが強い県北の観光の比重はごく一部であり、生産額から見れば「別に調べたない程度のものである」全市的な広がりの中で観光を位置付けるためには寂寞たるものがある。地域の産業を通じて観光を位置付けるためには、外から客を連れ込んで自動的に活り出すことには大いに疑問が持たれる。

観光は本来地域特有の生活や文化に、主体的に関わることである。そのために広く、ゆっくりと、時間を掛けて、観光を通じて「市民型観光」を目指した地域に、ある程度の都市機能を集約し、生産や消費などの経済活動をその中で活性化させる度合いを高めてゆく「地域内循環」の効果と可能性が討議された。

たまたま大洲市から出版した観光担当者によって、この二つの要望をとり込んだ生活の証拠が提出された（資料四）。

都市の都合もあるので詳細は他の機会に譲ることにするが、農産物の消費と自然環境の保全、それに都市と周辺地域を観光行政の主要な柱として測ることによって機能を成生かれられたのである。結果として農業振興、サービス産業振興、町並み保存などの文化活動、市民全般対策、河川浄化、住民奉加による緑の空間造成と修景などの幅の広さは、取り組んで一つ年目の実績としてはかなりのものである。

大洲の隣り町内子も、人口一万余の町だけに、歴史的町並み保存をキッカケにした観光地づくりから、地域の自立の問題にも踏込んでいる。

シンポジウムを通じて最も印象的に人々が感じたことは、やはり近代化として行われてきたことが、本当の意味の「近代化」であったのかという疑問ではなかろうか。それは「近代化」と称して、より大きな建物をつくり、一度に多人数を収容することばかりを進めてきた過程に限らず、都市のあり方、個人の生活などあらゆる「近代化」を問い直すことでもある。

五　地域主権プロジェクト

シンポジウムからほぼ半年を経て、第二回目の会合が、前回同様、市の主催でおこなわれた。これまでの経験をふまえた我々からのプロジェクトの提案とそれに対する行政や市民の反応が主たるプログラムであった（資料四）。

プロジェクトは、松山観光の姿勢たるいわゆる『市民型観光』『地域内循環』を基本にした戦略として提示された。具体的には身近かな村々である周辺、海岸、河川、海、温泉群等の保護や活用化、生活環境、生活技術、コミュニティ、社会教育、文化活動など、広範な領域と結み合わせながら、地理的な広がりと、市民や業界の奉加による人的な浮み上がりとするものである。

第一弾として、西国の原風景たるべき温泉道の再生と現代都市における真の再生を意図する「プロジェクト・ふるさとの道」が北西部市町村の実情調査のような雰囲気の中で興った若い市民達のプロジェクトである。

前段として長野県飯田市においても市当局が我々の企画を受け容れて同時のシンポジウムを開催した（資料四）。その後市長が産業懇談会を招聘して、観光と漁産業との関わりを討議し、目下その作業が進行中である。

観光の語源は中国の古典『易経』に由来する「国の光を観る」である。という。新しい観光行動が地域と主体的に係ることだとすれば、地域にとっての国の光とは固有な地域本来の姿の中にこそ見い出されるはずである。

こうした発想から、行政の、一連の展開が、松山市はもとより、飯田市など各地で、ほぼ時を同じくして進行しているのは大変興味深いことである。

（参考資料）

(1) 猪爪範子「観光観光と市民のまちづくり」観光（社・日本観光協会）六九号・五二年九月

(2) 猪爪範子「市民型観光へのまちづくり」

(3) 猪爪範子「観光とまちづくり」（社団法人）五二年六月

(4) 猪爪範子「観光とまちづくり」（社団法人）五二年四月

(5) 「特集・観光とまちづくり」地域開発（財・日本地域開発センター）五二年三月

(6) 辻田和人「市民がつくる観光文化都市」五二年三月

(7) 松山市「市民がつくる観光文化都市」五二年三月

(8) 「まちづくりと観光」環境文化（財・環境文化研究所）二九号・五二年八月

図７　用語「まちづくりと観光」「市民型観光」の使用
出典：猪爪範子「まちづくりと「観光」●愛媛県松山市」『ジュリスト増刊総合特集9＜全国まちづくり集覧＞』、有斐閣、1977 に加筆（赤枠）

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

1977(昭和52)年1月には、道後温泉本館の2階の和室を借りて松山市主催のシンポジウムを開きました。地域社会研究会を支えてくださっていた都市計画の大御所高山英華さん、木原啓吉さん（朝日新聞記者、後に公益社団法人日本ナショナル・トラスト協会名誉会長）や清成さんなど、いろいろな分野の先生が参加してくださいました。その準備作業中に、たまたま見ていた地元新聞に、内子が町並み保存に向けて動き始めているという、小さな記事を見つけました。シンポジウムのエクスカーションとして、陶芸の砥部町、それに内子まで足を延ばし、宿泊先に大洲市を選びました。内子では、町並み保存を行政の立場で推進し、孤軍奮戦していた岡田文淑さんが勘を働かせてくれて、見ず知らずの私たち一行を受け入れてくださり、いい出会いとなりました。

用意して下さっていた昼食が、それは素晴らしかったのです。有馬温泉で修行して帰ったばかりの息子さんがいる旅館で、実に洗練された美味しいお料理に、誰もがびっくりでした。今でいうところの、地産地消、オーガニック、スローフードなどがぴったりとはまっていて。余談ですが、地域社会研究会の事務を仕切っていた女性が、その後いろいろな結果を経て、河内さんの後に町長職に就いた役場職員の方と結婚しました。江戸っ子の一人娘さんでした。高山先生はことあるごとに、「高くついた昼飯だったんじゃないかい」と、嬉しそうにおっしゃっていました。

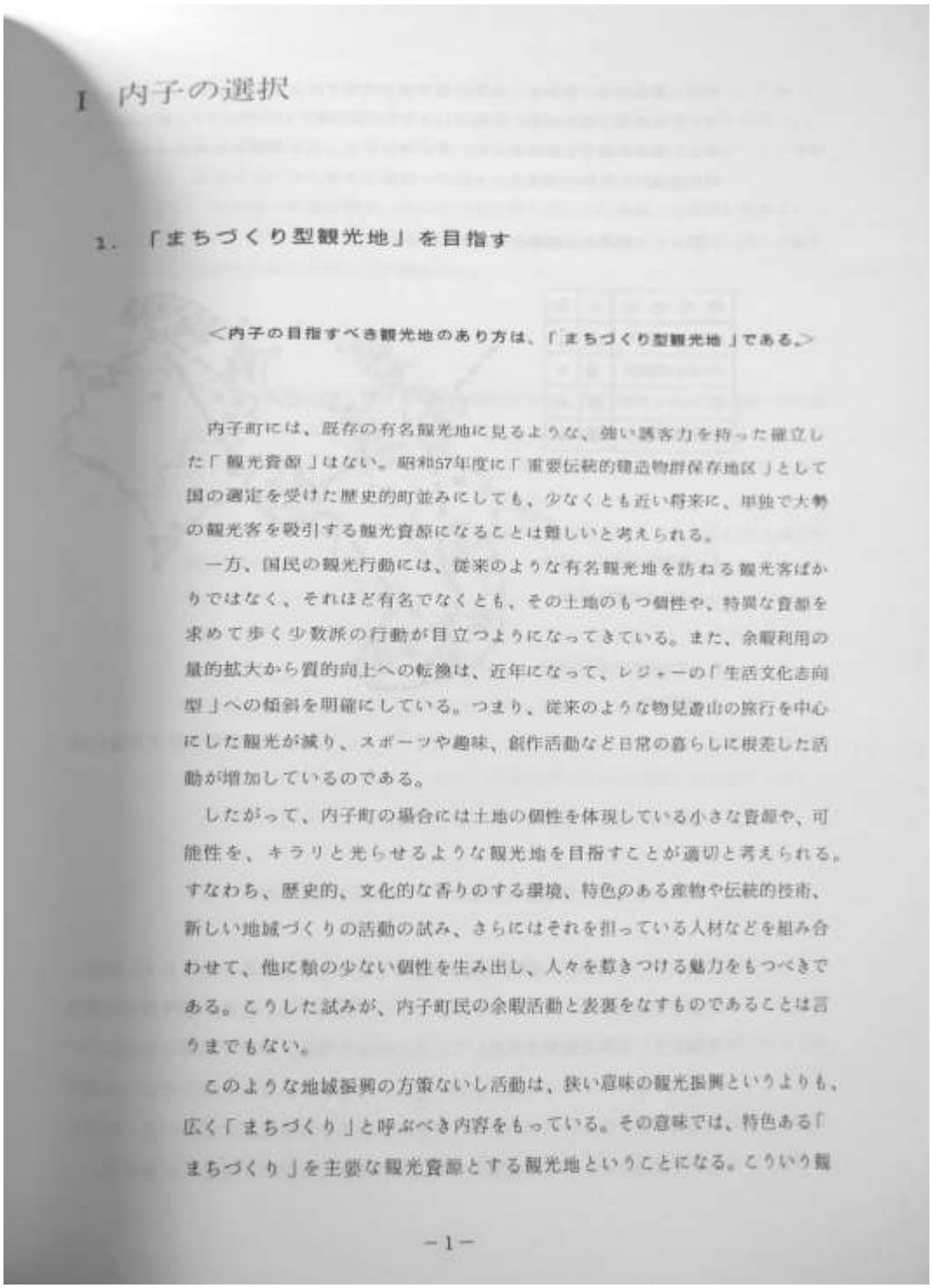
その初訪問の時、岡田さんからまちなみ保存をしたいけど、どうすればいいかわからない、県庁も動かないという話を聞き、木原さんが文化庁に直接かけあって、町並み保存の地区指定が実現しました。その岡田さんが企画課長に就任し、観光も担当するようになり、私たちは岡田さんから依頼を受けて内子町の観光計画を作りました。

この観光計画は長生きしました。岡田さんの後任の女性企画課長が「困った時にはこの計画書を見る。そうすると、何か書いてあるから」っておっしゃってくださって。いわばバイブルだと。こちらは、「え、そうなの」という感じでしたが、たくさんレポートを作ってきたなかでも、めったにあることではないですね。日常業務で使ってもらえるような、指針となるようなレポート。外部の専門家としての立ち位置を実感できた経過でした。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

図 8　内子の『光』を『観』なおそう 内子町観光振興計画書　表紙
出典：地域総合計画研究所編、内子町、昭 58(1981)年

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.



I　内子の選択

1.　「まちづくり型観光地」を目指す

＜内子の目指すべき観光地のあり方は、「まちづくり型観光地」である。＞

内子町には、既存の有名観光地に見るような、強い誘客力を持った確立した「観光資源」はない。昭和57年度に「重要伝統的構造物群保存地区」として国の選定を受けた歴史的町並みにしても、少なくとも近い将来に、単独で大勢の観光客を吸引する観光資源になることは難しいと考えられる。

一方、国民の観光行動には、従来のような有名観光地を訪ねる観光客ばかりではなく、それほど有名でなくとも、その土地のもつ個性や、特異な資源を求めて歩く少数派の行動が目立つようになってきている。また、余暇利用の量的拡大から質的向上への転換は、近年になって、レジャーの「生活文化志向型」への傾斜を明確にしている。つまり、従来のような物見遊山の旅行を中心にした観光が減り、スポーツや趣味、創作活動など日常の暮らしに根差した活動が増加しているのである。

したがって、内子町の場合には土地の個性を体現している小さな資源や、可能性を、キラリと光らせるような観光地を目指すことが適切と考えられる。すなわち、歴史的、文化的な香りのする環境、特色のある産物や伝統的技術、新しい地域づくりの活動の試み、さらにはそれを担っている人材などを組み合わせて、他に類の少ない個性を生み出し、人々を惹きつける魅力をもつべきである。こうした試みが、内子町民の余暇活動と表裏をなすものであることは言うまでもない。

このような地域振興の方策ないし活動は、狭い意味の観光振興というよりも、広く「まちづくり」と呼ぶべき内容をもっている。その意味では、特色ある「まちづくり」を主要な観光資源とする観光地ということになる。こういう観

－1－

図 9　内子町観光振興計画書 1 ページ「まちづくり型観光地」
出典：地域総合計画研究所編、内子町、1981(昭和 58)年

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

〈原宿にいた「もう一人の中谷健太郎」〉

東京の表参道の商店街振興組合は昔「原宿シャンゼリゼ会」という名前で（現原宿表参道欅会）した。ここにも振興計画があって、中心的な推進者である、当時の組合長さんに会いました。私の住居が原宿駅最寄りにあることと、東京農大の授業に、臨場感ある東京の現場を教材にして、学生さんたちと議論したかったからでもあります。組合長さんの熱意と実力によって、この振興組合は数億の事業予算を持ち、沿道修景、ケヤキ並木の管理、地区計画導入、イベント企画実施、街路の清掃など、広範囲な公共的業務を担っていました。エリア全体の価値を上げる活動をすることで、集合体としての街がよくなり、ひいては個別の事業活動も活性化する。由布院での展開と、なんとよく似ていることかと、思いました。

当時の組合長さんであった団塊の世代と推測する隅田さんは、個人で費用負担してリタイアした信用金庫の支店長さんを雇い、振興組合の専従スタッフとして働いてもらっていました。地元の方々が身銭を切って街区を整備し、賑わいを生み出すことで、個々のビルや店舗の価値が上がり、個別の事業活動も活性化する。きれいなユニフォームを着て表参道を掃除する人達が今もいますが、この発想も往時の振興計画の中から出ているようです。

表参道でガソリンスタンドを経営するご両親のもとに生まれた隅田さんは、場所を移して家業であるガソリンスタンドを経営するほか、乗馬クラブや喫茶店、レストランなど、自分がやりたいことをビジネスにしているような感じの広がりでした。エコロジーという言葉が流行するずっと前に千葉に農場を買い、経営しているレストランの残滓を運んで、そこでつくったたい肥で野菜を栽培して、それを東京に戻してレストランの食材として活用することにもトライ。シーズンになると、レストランの店頭が小さな八百屋になって、そういう店舗が少ない原宿界隈なので、私は大いに利用させてもらっています。

「エネルギー屋だから、化石燃料が枯渇することは目に見えている」と、所有するビルには早くから太陽光パネルや風力発電の装置がありました。市民目線の水平思考とそれを実現する力が、世界中から人を集める表参道の賑わいを作っているわけで、学生さんたちには、この界隈を歩いてもらいながら、賑わう装置を見つけ出しレポートしてもらいました。由布院の中谷さんとの交流があるのかしらと思うくらいに、根幹の考え方が似ていました。学生さんたちからの指摘を並べて見るにつけても、地域を総合的に捉えて管理していくことこそが、持続性を高める力になると。これこそが、観光をも包括した地域づくりの秘訣ではないかと思うのです。

分野を切らずに横断して結んだスタンスは、縦割りでしか動けない行政のあい路を掻い潜り、地域全体をカバーします。由布院と原宿。全く異なる地域の振興方策の考え方が同じことに興奮しました。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

図 10　『原宿 1993』商店街振興組合 原宿シャンゼリゼ会

〈大学での非常勤講師、博士論文、奨励賞へ〉

地域総合研究所を設立してからは、設立経緯と活動の特色をベースに、多様な地域、テーマ、クライアントと出会いました。それが造園大賞受賞、自治体学会公募懸賞論文一席受賞につながり、国や地方自治体の審議会などへの参加機会が増えました。その流れで、関東学院大学と母校の東京農大で非常勤講師として教壇に立つようになりました。関東学院大学工学部 2 部で計画学総論、建築学科 1 部で景観論を、東京農大で特論、環境計画基礎、観光ﾚｸﾚｰｼｮﾝ計画論を担当し、その後、東京農大での観光ﾚｸﾚｰｼｮﾝ計画論に絞って担当しました。

東京農大で観光レクリエーション計画論を頼まれた時、最初は何を話していいかわかりませんでした。サイトや施設の計画なら、前提が固定しているから伝えやすいのですが、観光レク計画となると、基準が定かではありません。計画を実施する主体も、一定ではありません。折々の社会状況によって、根幹となる部分まで変わるし、対応する広がりも予想外に拡大していきます。例えば、リゾート計画などは、その最たるものです。国をあげて推進したリゾート開発の促進が、10 年持ちませんでした。地上げに翻弄された地域は、目標を達成することなく、残骸を押し付けられて疲弊しました。

ですから、時代を越え、多様な担い手を鼓舞する計画には、計画担当者に時代を越える自分自身の座標軸のようなものが欠かせないと思います。そうでないと、計画が、地域を殺す凶器になってしまいます。私が学生さんに伝えたかったことは、対象となる地域の持続性を担保するようなスタンス。そのための、自分自身の立ち

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

位置を明解に持つべきということでした。いろんな現場に行って、ボランティアでもなんでもいいからそこで関わりを持ち、自分自身でどういう部分がよく、何をすれば地域が持続的に発展できるか。そのことを見極める力をつけるべきということにつきると。

でも、学生さんは、私が実感を持って言うことに対しては起きて聞いているけど、調べてきたこと、必ずしも自分のものになってないことを言うと、みんな寝るんです(笑)。だから、表参道のような、フィールドを共有できる場所を特定して、授業内容を構築しました。ただ、ぶらぶら歩くより、賑わう街の装置のようなもの、それを可能にする体制などを探る方が面白い。こういう授業は、寝る人がいませんでしたね。

由布院など地域づくりの活動経過は、論文「農村における観光地化の過程の研究」としてまとめ、東京農大に提出し、学術博士を授けました。最初は農学でしたが、観光地化によって農村が保持できたというストーリーじゃないと許容できないということで。由布院の場合、大規模なリゾート開発は、農政による大規模な土地開発の失敗を糊塗するかたちで入ってきている実態があるのですがね。でも、その論文に対して、日本都市計画学会から「論文奨励賞」をいただきました。60 年代からの由布院の変化の要因を分析したこの論文は、いままた、激変する地域に対して有用であると、密かに自負しています。ただ、私の紆余曲折が理由で、いい形で由布院の方々に結果を戻していないことが心残りです。

〈定年直前で広島市役所へ〉

58 歳の時に、たまたま広島市が女性助役を募集していると新聞で見て、特に縁がある土地ではなかったのですが、軽い気持ちで応募したら最終候補までいっちゃいました。助役選任は市長の選任事項ではあっても、議会の同意が必要でした。

でも、当時の市長秋葉さんと議会が不仲で、助役選任は 3 月の議会で否決され、次の議会でも否決。結局、企画理事という一般職で就職しました。就職にあたっては、今までの仕事は全部辞めるという前提でしたから、あちこちに不義理をしました。国の審議会と大学が難儀で、負担感も大きかったです。大分県湯布院町由布院温泉事務局長が、町役場の嘱託職員の辞令を受けたものだったので、2 回目の役所勤務となりました。

59 歳で入って 60 歳で定年退職したので、広島にいたのは 1 年足らずです。三役に年齢のリミットはないけど、一般職員だったからしかたありません。でも、市長、助役、収入役、企画総務局長に次ぐポジションでしたから、市としてのデシジョンの場面を、全部見せてもらった感じでした。

ごく短期間しかいませんでしたが、役所は一筋縄ではいかないということを実感しましたし、やはり縦割りの世界だからこそ、組織内のポジションが上でないと、偉くならないと全体が見えないということもよくよくわかりました。

それにしても定年なんか自分で決めようと思っていたのに、フリーターの極みを自負していた私が定年退職するなんて、自分でもびっくりですよ。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

〈JICA の短期専門家でインドネシア各地へ〉

広島市役所に就職する時にあらゆる仕事や所属を辞めたので、2002(平成 14)年に定年退職した後は再び、フリーランスに戻りました。その後、国際協力機構(JICA)関連でいくつか国際交流関係の仕事をしました。インドネシアへの派遣もその一つです。

当時のインドネシアはハビビ大統領に政権が変わり、それまでは「ジャワ主義」といってジャワ中心だった政治から地方分権を進めたいということで、そのための部署が新設されました。地方分権を草の根で進める体制や事業への助言が私の仕事でした。何度か現地を訪れましたので、通算したら半年くらいインドネシアに滞在したことになりますかしらね。

この時に出会ったのが、ジョグジャカルタでの野蚕生産事業です。JICA とは無関係なプロジェクトでしたが、本題に留め置かず、キョロキョロするのが私の癖なものですから。ジョグジャでの寄り道は、日本にもいますが、インドネシアにいる野生の蚕は、桑ではなく、マカダミアナッツとかカシューナッツなどの樹木の葉を食べて育つ、さされたら痛くなる、どちらかといえば害虫に類する大きな蛾の繭です。繭も蛾も通常のカイコの何倍も大きいんですよ。

ジョグジャカルタは独立時に初代大統領になったスカルノが拠点を置いた都市で、その時、日本軍が独立に好意的だったそうで、対日感情も悪くありません。日本では京都にあたるような古都で、実際、京都とは姉妹都市提携を結んでおり、現地に西陣から人が来て、糸をつむいでいろいろな製品を作る技術支援をしていました。繭が金色で、ゴールデンコクーンとして今では知られているようです。

このほか JICA 九州では、ASEAN 諸国の公務員を対象に一村一品運動についての研修を行っていて、私は数年間、日本の内発的な地域振興の経過についてレクチャーしました。

〈ツーリズムおおいたの事務局長〉

2005 年、大分県のツーリズムおおいたの事務局長に就任しました。当時、大分県庁の中に観光協会がありましたが、様変わりさせるために、別府に移しました。いろいろともめ事があって、私はすぐに辞めましたが、辞めてから、大分県の観光戦略をつくりあげました。これは、九州地方整備局の予算を得て作成したものです。このツーリズムおおいたは、観光協会の名称を変え、民間化する試みでしたが、従来からの県が主導する体制をそのまま継承してしまっていて、私のような民間人が許容できない内部事情を抱えていました。就任早々で逃げ出しましたが、その前に面白い女性に出会いました。

県南部の、佐伯市蒲江のリアス式海岸に住んでいる橋本正恵さんです。少し前まで、定置網の権利を持っていて、漁業で稼いでいるなかなかのやり手の女性ですが、「背広にネクタイの男は信用ならん。自分たちが始めたことがうまく動き始めると崩しにかかる」と、怒っていました。

彼女が、自分の思いを本にしたいというので、資金を調達して、知り合いに聞き

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

書きを頼み、書き下ろしの本を作りました。「海業（うみぎょう）」というタイトルは私がつけました。漁業ではなく、海業。林業ではなく、森業。地域に根差した産業は、それを可能にする環境、広くその地域の生活や生活者をも含んで成立しています。前から使っていましたが、彼女の話は、私の問題意識に、ぴったりと沿ったものでした。

橋本さんは、地域の津々浦々に知恵があり、それを役所がコントロールして押さえるのではなく、伸ばさないと地域は発展しないと言っています。ちゃんと本にすると、言いたいことがきちんと伝わり、「変なおばさん」の妄言ではなくなります。県が、あちこちの部署で買って配ってくれたそうです。京セラ元会長の稲盛和夫さんも、訪ねて来たそうです。この本が介在していることは間違いないでしょう。

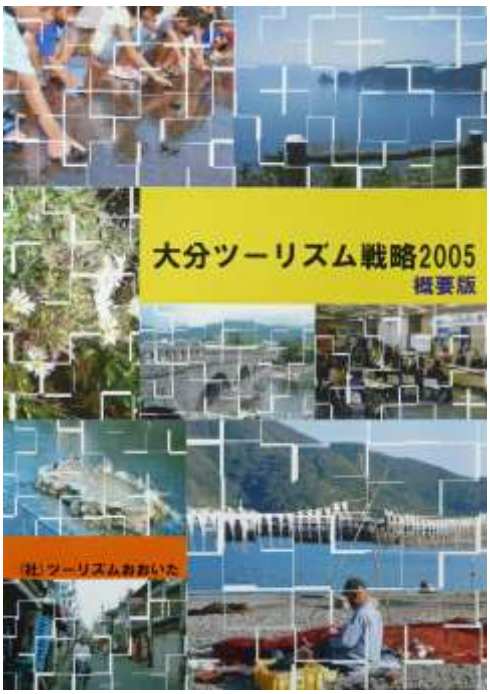


図 11　『大分ツーリズム戦略』（社）ツーリズムおおいた

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

図 12　『海業』表紙

【観光分野での業績、そして自慢できる功績は何か】

〈自治体学会の公募研究論文一席受賞〉

1980(昭和 55)年、懸賞論文で東京農大から造園大賞を受賞しました。40 歳少し手前の頃です。1982(昭和 57)年に、「もう一つの学校」というタイトルで自治体学会の公募論文に投稿して一席を受賞。この内容は、そろそろ、生涯教育の必要性も言われはじめていた頃でしたが、教育とは学校教育だけではない、生涯学ぶ機会を持ち、新しいことをインプットし、考えながら自分を変革し、そこから社会とつながれば、社会も変わるというようなことを書きました。随分前の論文ですが、今の世の中、そういう方向が当たり前になりました。2000(平成 14)年には、東京農大で受理された学位論文に対し、日本都市計画学会から論文奨励賞をいただき、これには驚き、かつ恥じ入っています。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

３．「観光」に対する失敗と反省

【我が国の観光のなにが問題か】

〈縦割り行政の限界〉

役所がどれだけ縦割りの世界であるかは、いろんなところで体験しました。由布院に関わり始めた頃、住民サイドはポスターやパンフレットでの宣伝をしないでと役所に申し入れていました。由布岳や温泉の湯けむりだけのきれいな風景だけ宣伝しても、しょうがないだろうという主張でした。そのころ、観光行政と称して、役所が何をやっていたかと言うと、キャンペーンでした。キャンペーンに欠かせないのがパンフレットやポスターの作成。県の先導で、やまなみハイウェイ関連自治体が構成する協議会に予算を組み、役人だけで都市部にキャンペーンに行っていました。旅館経営者を中心に、そんなこと必要ないというのが住民サイドの意見。本当にやってもらいたいことは、河川の 3 面張りをしないでとか、駅前を緑の環境にしてとか、放牧している牛が登山者の落とすジュース缶のプルトップを食べて死ぬので落とさないでとか。こうした要求は、管理責任者が違うとか、所管事項が決まっていて観光サイドが口を出せないとかの理由で却下されるばかり。当時の清水町長が、キャンペーンやパンフレットによる宣伝が観光行政のすべてだからやらせてと公言していました。このあたりは、中谷健太郎さんが執筆された『たすきがけの由布院』に詳述があります。昔の本ですが、ぜひ参照ください。

広島市役所では、議会で「学齢前の子どもたちが朝ごはんを食べないのは問題」という質問が出たときの対応に驚きました。議会の質問は、事前に企画課長が議員からヒアリングして文書化し、内容を精査して所管課が答弁書を同じように文書化します。この時は、答弁書が 2 つ出ました。保育園は厚生、幼稚園は教育委員会と所管が違うので、それぞれから答弁書が出たのです。

今は幼保一体でどうなっているかわかりませんが、内容にほとんど違いのない二つの文書を前に、この割り切りはどこからきているのかと考え込みました。そもそも、学齢前の子どもの朝ごはんはどうあるべきか、行政はどう関わるかなどの議論などどこにもないのです。

議会前になると、市長、助役、収入役、それに私を含めた 2 人の局長の 5 人で、全部の回答書を、執筆した部署の人たちから直接説明を受けます。つまり、このレベルにならないと、役所の仕事の全体像が見えてこないのです。全体が見えないということは、他の部署とのつながりが見えないと同じです。広島市役所には、１万 2 千人の職員がいます。全員決められた所管事項以外を知らなくてよいし、知っていても口を挟むなどしないのがルール。言われるところの、根深い縦割り行政の弊害とはいえ、こんなバーチャルな政策が役所から出て、市民生活や企業活動はよくなるもんですか。

ツーリズムおおいたに勤めた時は、農家民泊が始まったところでしたが、農家の

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

サイドは地域の観光協会に入っていないんです。「入ればいいのに」というと、「役所の管轄窓口が違うから」と。今は変わったかもしれないけど、農家民泊は農政であり、観光とは所管部局が違うということでした。

福井県で百景を指定するという委員会に参加した時も「もし景観を指定するなら、指定した百景が今後 10 年、20 年存続するために下支えできるよう、文化財保護や河川改修などいろいろな行政部局と組まないといけない」と言ったけれど、全然相手にしてもらえませんでした。観光部局としては、とにかく百景を指定して紹介するパンフレット作って宣伝すればいいということでした。

観光行政って、所管という小さな枠組みにとどまってしまうと、お宝である地域資源の破壊者になっていまいませんかしら。一時期、文化行政がはやって、総合行政を目指したことがあったでしょう。「文化の 1%システム」といって、あらゆる予算から、１%は文化にあてようと。観光行政においても、所管事項を越え、組織を横断する工夫が絶対に必要です。私は「おもてなし」という言葉が好きになれないのです。そこに、地域の持続性を担保するニュアンスが感じられないからです。

【観光分野で何を失敗し、反省しているか】

〈悲しい成功事例〉

日本全国には、観光で発展した地域が多くあります。観光客が増え、描いていたことが実現し成功事例として紹介されることもあるようですが、必ずしも地域の持続性が保証され、そこに住む人が当事者として果実を得たかどうかわからないですからね。各地の現状を見て敢えて言うなら「悲しい成功事例」とでもいいましょうか。そんな光景が見られます。開発は人間が生きていく上の、避けられない、むしろ喜ぶべきプロセスかもしれませんが、掛け替えのない地域のストックを破壊してしまう観光の威力を、怖いと思います。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

４.「観光」の計画とその実現

〈観光計画の体系〉

観光計画という分野が確立しているという前提で、この質問項目が立てられているのだと思いますが、私は観光計画だけをやってきたわけではありません。思い返せば、持続的な地域のありかたを、主に市町村行政の現場の方々とともに模索してきたと考えています。

由布院の草創期と思われる40年前、旅館の奥さんたちは、インスタントでない、本当のコーヒーを楽しみたいと頑張りました。お客さまもさることながら、「私が美味しいコーヒー飲みたかったからよ」という動機。ウエッジウッドのイチゴ模様のカップとソーサーがまぶしく見えた時代です。特別のおもてなしではなく、「自分たちの生活そのものを共有していただく」。このスタイルが好きです。それで、成功の果実も手にしました。いうところの、生活観光地です。しかし、今は外からたくさん資本が入ってきて、コミュニティは変質しています。

「川が大事だよ」とか「道をきれいにしよう」などの課題を、気持ちのいい顔見知り関係のコミュニティが変質したいま、どういう道筋を辿ることで地域の合意に導けるでしょうか。空念仏の自己満足に終わらない計画とは、誰に向けて、どんなアプローチをすべきでしょうか。ここでも、由布院のケースは生きてきます。それは、ここで、どういう風に生きることが格好良いのか。その姿を、リーダー自身が自分で具体的に示しました。だから、外部から流入した資本も、ここで稼ぐには「木造平屋がよさそうだ」、「家のまわりに樹林が必要だな」、「泊まる人向けだけの施設でなく、ふらりと立ち寄る人たちのための空間やサービスを旅館内に用意すべき」などなど、形の模倣を始めました。

広島市役所で働いていた時に知り合った人たちが、水上タクシーの会社をNPOで立ち上げて始めました。もう、10年くらいになるでしょうか。市や、河川管理者である国も手掛けようとしましたが、成就しなかった事業です。趣味とボランティアでなければなりたたない。一方、河川での運行の安全、何か起きたときの対応について、幅広く知識を持ち、対応を万全にしておかないと、問題が起きたらすぐに中止勧告を受けることは、明白です。さらにやっかいなことは、一級河川での水上タクシー運行を管理する役所の部署、それに法律や条例もいまひとつはっきりとしていません。

水上タクシーひとつとっても、観光計画という形で、「こういうことをやったらいいですよ」と書くことの有意性を疑います。パチンコ台を思い出してください。板面に絵がかいてあります。たくさんのポケットがあって、そこに導く釘が打ってある。聞けば、釘師という職業があって、玉を誘導する道筋の釘を動かして調整するという。板面の絵、落としどころとしてのポケット群、そこへの誘導を促す釘、日々調整するその向き。観光計画を、こんな風に整理して学生さんたちに話せばよかったと、今になって思っています。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

幸いなことに、私は、地域振興という観光も包括するところから地域と向き合えました。役所がクライアントだからといって、単年で終わらせずに経年の変化に付き合う体制や余力もありました。トップデシジョンによって対象地域に遭遇するという幸運にも、恵まれました。実に幸運だったと思います。

〈地域の人と一緒に作るのが当たり前〉

観光計画は、地域の方々の話を聞いて、一緒に作ることが当たり前だと思っています。だって地域の人達が当事者だから。私たちプランナーは一過性の旅人であり、何もしなければ、1 年未満で多くの関係が終わります。その間に、当事者の思いを、どれだけ引き出すことができるか。立場の違う当事者に、どれだけ計画の内容をインプットしてもらうことができるかが勝負どころだと思っています。

だから自分が作った計画が実現したか、成功したかということを考えたことがないです。私に与えられたフィールドは、そんなに単純ではないからです。キャンプ場や、野菜の直売場をつくるなど、単体のハード事業なら別でしょうが。

結果としてこのみち一筋できましたが、長い経験から、私は、正義も真実も多様にあるのが地域社会だと思うようになりました。自分自身の立ち位置によって見えてくるものは違います。だから、外部の専門家として現場に立ちながら、自分は正しい場所に位置しているかどうかを、いつも気にします。正しいとは、地域の持続性にかなっているかどうかにつきます。そうであっても、私たちの考え方は、報告書によって残すことが通常です。すぐにそれがかなわなくても、不思議とその痕跡は残るものです。曖昧ないいかたをしないで、時には、大胆なビジュアル表現で方向を示しながらです。それは独り歩きして、思いがけないところで浮上するケースを、数限りなく体験しました。

住む人の目線に立った観光。市民型観光。住んでよく訪ねてよい。まちづくり型観光、ムラおこしなどが、いま、違和感なく使われていることに感動しています。

〈提案が一人歩きすればいい〉

観光計画って、作ってもすぐに実現しないのが常ですよね。事業化までには距離があります。当事者がその気になるまで時間もかかります。ともかく、短年では勝負がつきません。だから、観光計画書のポイントは、意思表示を明解にすることに尽きると思います。そういうことを意識した作り方をしてもきました。

特に、観光計画などで使っていた言葉や提案が部分的につまみ食いされて、あとで動き出す。洪水の後に中州が三日月型に残るみたいに、前後の脈絡はないにしても、ある形が残る。いつか浮上するような仕掛けをしておきます。提案者の立ち位置が間違っていなければ、できます。そのために、後で浮上しやすいように、将来を見据えた、大胆な提案を残すようにしました。

地域総合研究所が、墨田区の委託で観光計画を作りました。国技館も江戸東京博

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

物館もできる前の時代です。“都民”のためのレクリエーション行政や外国人の案内だけが観光行政と考えられていた時代です。この時、当時の山崎区長は「下町という言葉を使うのは嫌だ」とおっしゃいました。「下町人情というのは電車にいち早く乗りこんで、後から乗り込む仲間のためにハンドバッグや帽子を置いて席をとるようなこと。そういうのは、心が狭いから嫌だ」と。宿題は下町に変わる別の言葉を考えよう、でした。現代的な下町の再生の意味合いも込めてということで、作ったのが、「川の手」という言葉です。今はほかでも使われているみたいですが、墨田区が一番最初です。当時の荒川区長にヒアリングをしたときに話したら、彼はすかさず河畔の再開発の名称にこれを採用しました。その年の新語大賞も受賞したような記憶がありますが、荒川区と墨田区のどちらが言い出したか、問題になったらしいです。言い出しっぺは、私たちに他なりませんが。

図 13　『情報発信都市すみだ』

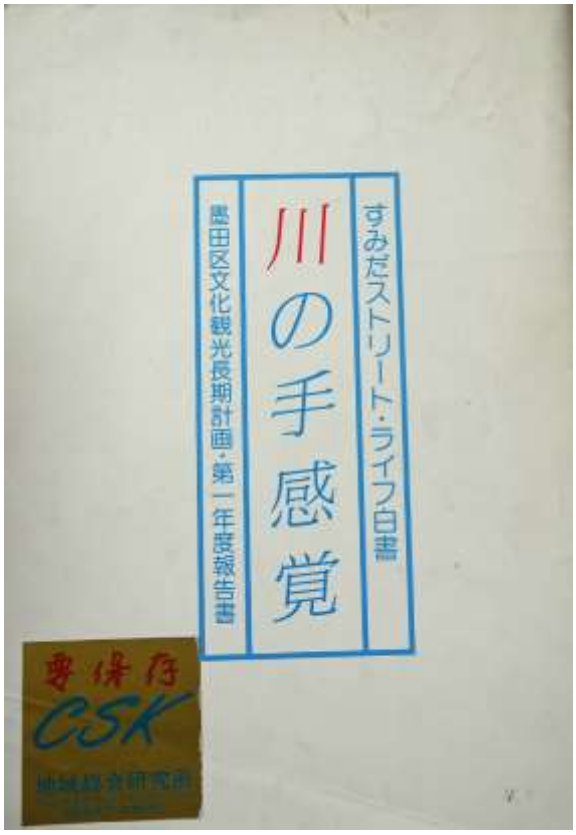


図 14　『川の手の感覚』

ちなみに墨田川を水上交通に利用しようという提言は、この時が初めてです。まだ川が汚い時代でした。時間はかかりましたけど、その後に東京都のマイタウン構想に採用されて、今では実現しています。

広島市役所では、早晩、去る覚悟をしていましたから、何かを残そうと画策しま

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

した。それで、勝手に観光計画を作って置き土産にしました。ただパソコンから打ち出した原稿を置いてきただけでは日の目を見ないに決まっているので、自腹で冊子を印刷し、「お世話になりました」という言葉とともに、市長をはじめ、いろいろな方々に配ったんです。あとで、印刷費は戻してもらいましたが。

「千客万来のまちづくり」というタイトルで、観光を産業として位置づけようという内容でした。国際平和文化都市に観光などそぐわないというのが、当初、つよくありましたね。千客万来という言葉は、かつて市長さんだった方の本が残っていて、そこに広島市はこうあるべきという提言とともに、記述されていました。さらに、私は、観光をビジターズ・インダストリーと言い換えることで、プライドの高いこの都市の、観光への違和感を除くようにしました。負の歴史を背負ったこの大都市を訪問する人たちは多様なので、観光客ではなく、ビジターズと言い換えることもしました。当時の秋葉市長が辞めてから出版した本(『ヒロシマ市長 〈国家〉から〈都市〉の時代へ』朝日新聞出版)で、一章分使ってその観光計画の内容について紹介していました。東京都でも、後で千客万来という言葉を使いましたね。そもそものところは書けないにしても、書き物として形を残すと、残骸でもそこから何かが残ります。使われやすいようにしておくことが重要です。だから、自分によって成功がもたらされた観光計画というとらえ方はしたことがありません。

ビジターズ倍増に向けて

― 千客万来の広島の実現 ―

平成16年(2004年)5月

広　島　市

図 15　『ビジターズ倍増に向けてー千客万来の広島の実現ー』
広島市、平成 16 年(2004 年) ５月

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

５．これからの「観光」・「観光地づくり」・「観光計画」への提言
【これからのわが国の観光、観光地づくりに必要なことは何か】

〈『座標軸』を持ってアプローチすること〉

社会正義の転換が激しいと感じています。地方救済の切り札として 20 世紀末に登場した通称「リゾート法」によって、地方の山野は地上げされ、切り刻まれて、目的を達成できないままに放置されている状況にあります。行政が主導した郊外居住の推進によって、都心から遠い土地が大規模に開発され、そこに生涯をかけたローンを組んでマイホームを建てた人は多いです。しかし、21 世紀になって、都心回帰、コンパクトシティの政策に風向きが変わりました。交通不便な郊外に、残余のローンを抱え、次世代から同居を断られ、取り残された高齢世帯をどうしたらよいのでしょうか。

利害関係に捉えられない若い方たちは、学業と同時にボランティア活動を通じて社会に参加し、体験の中から、大人になっていく道を求めてほしい。そして、「何が人びとを『幸福』にするか」を考え、自分の基本的な立ち位置＝『座標軸』を定めてほしいですね。社会人となり、何かの事業に関わったとき、あるいは自身の人生の岐路に立ったときにも、その課題を自分白身の『座標軸』に沿って、裁量の範囲が乏しくても乖離を埋める努力をしてほしいと思います。実践の上に立った若者たちの思考の軌跡を共有することは、年齢を重ねても極めて刺激的ですし、実践を通じて自分自身でつくった人生を送るイメージを持てたら、さらに自由になれると思います。

〈持続可能な社会形成を目途とする〉

この道一筋に 45 年を過ごしました。立場は、政府の外郭団体職員、フリーランス、コンサル会社経営、行政職員、教育者、NGO 役員など、時に重複しながらいろいろに変わりました。テーマは、都市、農村、観光地、水、緑、景観、地域産業振興、子育て、介護、行政改革、ゴミ、公共交通機関、ジェンダー、コミュニティなど、社会の要請にしたがって、水平にテーマが広がりました。しかし、それを恐れることなくその道の専門家と渡り合えたのは、持続可能な社会、ひいては人々が不安を感じることなく住み続けられる社会づくりというスタンスがぶれなかったからだと自分では総括しています。旅や体験などを通じて、持続的な地域形成の必要を学べたことも大きかったと思います。

私の世代は、右肩上がりの高度成長期にあったものの、男女共同参画の助けはありませんでした。でも、悔しくて、こぶしをふりかざした時代は、30 歳までに終わったような気がします。女性であるがゆえに、体制や組織から自由であったということも、ここにきてわかったことです。水平にテーマが拡がる中で「何をしている人かわからない」と言われる弊害は常にありましたが、追従する同性の同世代に会うこともなかったですね。つまり、競争にさらされることもありませんでした。

Copyright(c) 2015 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

〈最後に～プランナーへの言葉〉

まず、それぞれが面白く生きないとつまらないと思います。面白く生きるには、自分の才覚を働かせることと、人との出会いも含めた「運」をつかむことに尽きると思います。

才覚を働かせて、運をうまくキャッチして呼び込んでいけば面白い一生になるでしょう。それはお金持ちになるとか、有名になることなどとは別のプロセスですけどね。

今の時代、70 歳を過ぎた私には、女性がどのように働いているかリアルにはわかりません。今でも差別が残っていて、出世しにくい状況があるならば、その分を自分らしく楽しまないと生まれてきた甲斐がありません。人と違うことを恐れず、自分らしさを押し出しましょう。そうすれば、自分らしく、明るく、自由に生きることができます。

私は組織にはまり切れなく生きてきました。阻害されたとは言いませんが、スタートは愉快ではありませんでした。だから、自分の道を、自分で探さないといけないという思いに立ってきました。私の東京農大の同級生の女性たちは、みんなそうして現在に至っていると思います。結果として得たものは、それぞれの分野のトッププランナーとして、走りきることができたということです。

今の女性プランナーへ向けた言葉はという問いに対しては、自分の才覚と運を活かして面白く生きましょう、ということに尽きます。長いようで短い、短いようで長い人生。陳腐ですが、面白く生きなければ、生まれた価値はないと思っています。

2015(平成 27)年 9 月 15 日

長野県上田市にて

取材者：公益財団法人日本交通公社観光政策研究部
梅川智也、後藤健太郎

2016(平成 28)年 1 月 22 日 文章校正終了

＊本文中の表現等については、取材・編集サイドで最終の修正等を行った。

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。
http://www.jtb.or.jp/etc